陸　羯南　（くが・かつなん）　1857～1907

新聞人・政論家　　～国民主義を唱えた近代ジャーナリズムの先駆者～

出生　安政４年10月14日(1857)、陸奥国弘前在府町（現・青森県弘前市在府町）に弘前藩近侍茶道役坊主頭 中田謙斎・なほ夫妻の次男として生まれる。。幼名・巳之太郎、改名して実。羯南は号で、古川他山の漢学塾に学んでいた折に作った「風濤自_靺羯南_来」の句に由来するという。

履歴　東奥義塾に入学(1873)。その後宮城師範学校に進むも、校長の措置を不満に退学(1876)。上京し司法省法学校本科に入学したが、賄征伐事件に関連して原敬（のち首相）・加藤恒忠らとともに退学を命ぜられ、やむなく帰郷、青森新聞社に勤める(1879)。この年、親戚の陸治五兵衛の絶家を再興し、陸姓を名乗る。しかし讒謗律により罰金に処せられ青森新聞社を辞し、内務省管轄紋別精糖所に移る(1880)。再び上京して太政官文書局（のち内閣官報局）の官吏となった(1881)。その後も羯南は大隈重信外相の条約改正案に反対、内閣官報局を辞して新聞『東京電報』を発刊(1888)。翌年、これを廃して新聞『日本』を創刊した(1889)。晩年は近衛篤麿に随い、清国・韓国視察(1901)をはじめ、ヨーロッパ視察(1903)に参加、各国を歴訪した。

事績　羯南は浅野長勲・谷干城・三浦五楼らのほか、杉浦重剛・高橋健三らの援助を得て、1889 年２月 11 日に『日本』を創刊。羯南が社長兼主筆を務め、福本日南・国分青崖・三宅雪嶺・長谷川如是閑らの論客・記者を集めて、藩閥政府による専制政治や皮相な欧化政策、追随的な条約改正などを鋭く批判した。そのため政府によりしばしば発行停止処分となったが、国民主義の立場を堅持し論陣を張った。日清戦争後、羯南はしばらく近衛篤麿の援助を受けたが、経営困難と病気を患っていたことが重なり、伊藤欽亮に新聞の経営を譲渡するに至った(1905)。

評価　陸羯南研究に際し、戦後まもなく丸山眞男により発表された評価は注目に値する。丸山は、当時、政治的対立関係にあるはずの藩閥政府と容易に妥協する民権論者が多いなか、羯南はナショナリズムとデモクラシーの綜合を意図し、豊かな世界性と進歩性を備え、その主張を実践として貫いたと評価している（参考文献「陸羯南―人と思想」参照)。また、植手通有は、羯南の言論は政論中心ながらも国民全体の歴史や社会・経済・思想・風俗・慣習との関連のもとに政治の動向を捉える点に特色があり、その観点が国際政治にまで及んでいると指摘し、日清戦争後には自由主義・立憲主義的側面を前面に社会全体の国家主義化の風潮に抵抗したことも評価している。

代表作

『**近時政論考**』　1888 年 12 月～1890 年９月までに、『東京電報』『日本』に掲載された長編の社説をまとめたもので、「近時政論考」「自由主義如何」「近時憲法考」の三編を含む羯南の主著である。このうち「近時政論考」は、明治維新直後よりの政治思想の変遷を跡づけた部分と、羯南自身の「国民主義」の基本的な立場を明らかにした部分とから構成されている。全集第１巻に収録。

『**原政及国際論**』　1890 年代はじめに発表された「原政」「国際論」「国際論続篇」「国際論補遺」の４つの論説から構成されている。羯南は当時の政界の動揺に対するはげしい批判や、心理的に欧米に同化・吸収されようとする危険性を指摘した著作である。全集第１巻に収録。

ｷｰﾜｰﾄﾞ　**国民主義**　羯南は条約改正交渉にみられる欧化主義に対抗して、内における国民の統一と外に対する国民の独立の観点のもと「国民主義」を唱えた。この背景には、明治維新以来藩閥政府による「上から」の急激な制度的近代化や自由民権運動による政治的な軋轢によって、社会秩序一般の解体を危惧したことによる。また羯南がいうところの「国民」とは道徳共同体としての「社会」を意味し、政治をつねに国民全体のうえに基礎づけ、その観点から個人の自由・権利の尊重と立憲政治の確立を明確に強調した。

ｴﾋﾟｿｰﾄﾞ　羯南と正岡子規の関係は文学史に名高い。子規は、賄征伐事件で羯南とともに司法省法学校を退学した加藤恒忠の甥にあたり、1883年６月末、加藤の紹介により羯南と出会う。このとき子規17歳、羯南27歳。それ以後子規は羯南に私淑し、1892年２月には東京市下谷区上根岸（現・台東区根岸２丁目）の羯南宅隣に転居、同年末には日本新聞社に入社した。その後、病魔に冒され働けなっていく子規に対し、羯南は月 40円の給金をもって厚遇するだけでなく、献身的に子規を支えた。子規も羯南の慈愛に応え、「歌よみに与ふる書」や最後の随筆「病牀六尺」などを新聞『日本』に連載した。

神奈川　晩年の羯南は病気療養のため鎌倉・湯河原温泉に滞在したほか、家族とともに鎌倉・長谷に転地、さらには鎌倉・極楽寺の別荘（浦苫屋）に移った。

最期　1907年（明治40）９月２日、肺結核のため鎌倉・極楽寺の別荘にて死去。享年 49歳。

Great Works　05

陸羯南全集　全10巻　みすず書房　1968～1985年　＜310.8／10＞

解題　各巻末に収録内容・時代背景等の解説があるが、特に第２～５巻解説では、『日本』の年間部数・発行回数等のほか、新聞紙条例の治安妨害により発行停止とされた回数・期間の詳細を記す。『日本』は創刊以来、新聞紙条例改正の1897年までの発行停止処分が全30回（計230日間）に及び、当時の政論新聞のなかでも際立っていた。とりわけ日清戦争前後の1894～95年は延べ94日の発行停止を命ぜられたが、年間発行部数は約640万部（1894年）、約686万部（1895年）と、むしろ増加している。処分の間、羯南は代替紙『大日本』等を発行して政論を展開し続けた。

内容

第１巻　『近時政論考』［日本新聞社　1891年］　『予算論』［日本新聞社　1890年］　『行政時言』［日本新聞社　1891年］　『原政及国際論』［日本新聞社　1893年］　『主権原論』［博聞社　1885年］　『東京電報』社説［東京電報　1888-89年］

第２巻　『日本』社説(1)［日本新聞社　1889年］　『日本』社説(2)［1890年］

第３巻　『日本』社説(3)［1891年］　『日本』社説(4)［1892年］　『日本』補遺［1891年］　『大日本』補遺［大日本新聞社　1892年］

第４巻　『日本』社説(5)［1893年］　『日本』社説(6)［1894年］　『日本』補遺［1893-94年］

第５巻　『日本』社説(7)［1895年］　『日本』社説(8)［1896年］　『日本』社説(9)［1897年］　『日本』補遺［1895,97年］

第６巻　『日本』社説(10)［1898年］　『日本』社説(11)［1899年］　『日本』社説(12)［1900年］　『日本』補遺［1899年］

第７巻　『日本』社説(13)［1901年］　『日本』社説(14)［1902年］　『日本』補遺［1901年］

第８巻　『日本』社説(15)［1903年］　『日本』社説(16)［1904年］

第９巻　『日本』社説(17)［1905年］　『日本』社説(18)［1906年］　『日本』雑纂［1890-1904年］　『日本人』［1895-1905年］　出版月評・時論［1888-1905年］　序跋［1892年］

第10巻　陸羯南書簡［26通］　陸羯南宛書簡［71通］　歌・詩・絵詞　追悼・回想　補遺　年譜

◆　*参考文献　～この人をもっと知るために～*

＜図書＞

📖　国民・自由・憲政―陸羯南の政治思想／本田逸夫著
　木鐸社　1994年　452ｐ　＜311.21CC／111＞　資料番号20712667

📖　陸羯南研究／丸谷嘉徳著
　勁草出版サービスセンター　1990年　267ｐ　＜289.1Y／2858＞　資料番号20238945

📖　陸羯南―「国民」の創出／小山文雄著
　みすず書房　1990年　350ｐ　＜289.1Y／2813＞　資料番号20184834

＜図書(部分)＞

📖　独立不羈の覚悟　陸羯南／鎌田慧著（反骨のジャーナリスト）
　岩波書店　2002年　ｐ1-23　＜070.28LL／3＞　資料番号21543905

📖　陸羯南―人と思想／丸山眞男著　（丸山眞男集　第３巻）
　岩波書店　1995年　ｐ93-106　＜081.6DD／124／3＞　資料番号21633854

📖　陸羯南―極楽寺に没した明治期の言論人／島本千也著　（鎌倉別荘物語）
　島本千也　1993年　ｐ194-198　＜K291.4／263＞　常置　資料番号60068921

📖　陸羯南／坂井雄吉著　（言論は日本を動かす　第４巻）
　講談社　1986年　ｐ3-34　＜281T／122／4＞　資料番号12357182

📖　陸羯南―ナショナリズムと言論人／植手通有著　（日本の思想家　１）
　朝日新聞社　1962年　ｐ238-252　＜121.9／65／1＞　資料番号10201614

＜雑誌論文＞

📖　陸羯南の交際論と政治像（上）／山辺春彦著
　東京都立大学法学会雑誌（東京都立大学法学部）43（2）　[2003.1]　＜Z320.5／33＞

📖　子規と陸羯南・その葛藤―正岡子規没後100年記念特集・正岡子規の革新性―／復本一郎著
　神奈川大学評論（神奈川大学広報委員会）40　[2001.11]　＜Z051.3／138＞